

## 0-2. 研究の背景

かかる今日の保守的なコーブランド像は、しかし、彼の長く多様な音楽活動の内実をどれほど伝えているのであろうか。先にみた一般的な受容の一方で、今世紀転換期以降の合衆国におけるコーブランド研究の成果は、彼の政治性をめぐる諸相を徐々に明らかにしてきた。なかでも特筆すべき事例は、1953年1月の連邦議会下院において、共和党フレッド・バズベイ議員が次期大統領共和党ドワイト・アイゼンハワーのために予定された就任記念演奏会の内容について意義を申し立て、そこで本来演奏されるはずであったコーブランドの《リンカーンの肖像》(1942)を演奏中止にまで追い込んだことである。この時、バズベイ議員が問題としたのは、コーブランドの政治性であった。つまり、コーブランドの「疑わしき〔共産主義への〕関与の跡を数多くもつ」とされた経歴が問題とされたのである。さらにその数ヶ月後には、コーブランドは国際的共産主義活動の事由から、いわゆる〈赤刈り〉で知られた共和党上院議員ジョセフ・マッカーシーに召喚され査問を受けることになる。今日では「アメリカそのもの」とも称される彼であるが、しかし、かつては連邦政府から非米活動分子とまで目された経緯があった。

コーブランドのこのような政治的、社会的立場は一時的なものではなくて、査問に至るまでの比較的長い期間維持されていたと考えられる。それは、バズベイ議員にして「疑わしき関与の跡を数多くもつ」との指摘からも明らかである。つまり、コーブランドの主要作品が生まれる1930年代から40年代における音楽実践の土壌にもまた、かかる政治的側面との関連を視野にいれるべきであろう。そうであるならば、今われわれの多くが共有する、かの保守的コーブランド像というものは、あるいは、すでに何か捨象された後の姿であるかもしれず、さらにまた、あらたな意味が社会的に構築された姿ではないかと推察することも可能であろう。

## 0-3. 研究の目的

本論第2章〔先行研究の検討を行なう章〕で詳述するが、合衆国の音楽研究において、戦前期のコ

ープランドの政治性については長らく忌避すべき領域とされてきた。むしろ、当時の論点としては、その音楽書法上でのモダニズム的性格や、アメリカのヴァンキュラーな民俗音楽との関連などがもっぱらであった。ここでの「政治性」の語を「ありうべき理想の共同体生活を求める関心のありよう」と定義するならば<sup>28</sup>、当該研究の変遷において、コープランドの政治性に研究的視線が向いたのは冷戦終結後であり、本格的な考察がなされるのは今世紀に入ってからである。この側面における研究事例は、合衆国においても未だ数例を数えるのみであり、日本国内においては例をみない。したがって十分な研究蓄積がなされていない状況である。

かかる研究状況を踏まえ、われわれは——先の「ケリー賛辞」的な——今日のコープランド像を一度括弧に入れて相対視した上で、彼の主要作品が創られた 1930 年代～40 年代を対象として、彼自身の生き様や、その作品に着目し、それらを当時のアメリカの社会動向との関係の中で考察することを通して、「現代アメリカ」<sup>29</sup> の形成過程における彼の文化的側面での役割りや位置づけを明らかにすることを本論の目的とする。

文化的成果物において「社会的で歴史的でないようなものは、なにも存在しない」<sup>30</sup> ことを謳い、「広義の形式主義から社会的政治的批評へと大きく転換」していく契機となった議論、つまり 1980 年代以降のイギリスやアメリカでの文化批評における思潮及びその蓄積を踏襲するならば<sup>31</sup>、コープランドを、当時のアメリカ社会の動向と無関係なる、いわば創造行為の淵源と考えることは、今日では困難なものとなる。敷衍して、先の思潮の源流としての 20 世紀人文科学上の先達における成果を真摯に踏まえるならば、いうまでもなく、もはや神学的創造性を携えた〈天才〉は措定しえない。音楽だけは例外とする合理的論拠は、われわれには見だしにくい。したがって、作曲家の言及のみ、並びにその楽譜の形式分析のみによる実体論的視座からの考察には、われわれはその限界を指摘せねばならない。かかる視点に基づけば、従来、客観的とも思われた「内在的」な考察や分析でえられるデータとは、その方途を徹底するほどに、畢竟、分析者が無意にも取り込まれたイデオロギーを、他メディアに換言したものにすぎないともいえる。さらに、フーコーやアルチュセールらを経由し、かつ、彼らの議論に現実感をみる立場であるのならば、もはや、かかるイデオロギーに内在する権力や政治性を見ずして考察する素朴さを維持するのは不可能である。同時に、もし、かかるイデオロギーの政治性の認識を有し、かつ、それを批判する論拠の提示のなきままに、それでもなお客観的の名のもとに、文化的〈テキスト〉の「内在的」考察を強調するならば、むしろそこには、強力なる隠された政治的含意及びそのイデオロギー強化を下支えするものとしての、およそ意図的なる営為として把握せねばならないことにもなっ

しまう。

かくして、本論の以降では、20世紀の先人たちによる知の営みをふまえ、すべてを「歴史化」<sup>32</sup>しつつ、関係論的視座において考察する方途を探ることが不可欠となるのだが、その過程で、今日において、いかに、音楽〈テキスト〉を読むかという試みもまた本論の目的の一つとなる。後に述べるように、とくに、ここでわれわれが取り組む映画音楽の読みにおいては、それが先例なき試みにて、たとえ網羅的でなく、現状で断片的であってもまずは提示を試みることに、すくなくとも映画音楽研究という蓄積のない領野においては意義があると考え。かかる方途の手がかりについては次節で述べることにしたい。

とまれ、われわれは本論の以降で、コープランドのみならず、彼をとりまいた20世紀アメリカをめぐる広範囲な動向にも目を向けざるをえない理由がここに求められる。はたして「現代アメリカ」の形成の過程で、アーロン・コープランドは、いかなる役割を担ったのであろうか。1930年代後半～40年代において、彼の内にあった、革新的な政治的左派の牙を考慮するとき、今日のわれわれは、彼の政治的・社会的信条をどのように再定位することができるだろうか。

## 0-4. 研究の手法

### 0-4-1 批評理論における〈テキスト〉の解釈をめぐる問題

考察において、われわれには、対象時期におけるコンテキストを加味したコープランドの活動の再考と同時に、コープランド作品に関する意味論的考察が不可欠となる。実体的で一義的な〈作者の意図〉を読むべき〈作品〉というよりも、「無数にある文化の中心からやって来た引用の織物」<sup>33</sup>としてそれを捉えることで、20世紀のアメリカの中に生きたコープランドが、社会との関係性の中で表現した意味内容を、われわれの側において読み解いていく〈テキスト〉と言うべきものとなる<sup>34</sup>。その意味においては、音楽〈テキスト〉ともいうべき、コープランドの文化的成果物を、一体、いかなる方法を用いて解釈すべきかが問題となる。分析で着目すべきは、意識的になされた表現のみならず、歴史化された存